



台湾協会70周年記念

コロナ対策でシンポ

日本の対台交流団体「台湾協会」（小椋和平理事長）は24日、東京・大手町のサンケイホールで創立70周年を記念したシンポジウム「台湾人と日本人」を開き、公衆衛生と新型コロナウイルス対策をテーマに議論した。写真（納富康撮

影）。

拓殖大の渡辺利夫学事顧問は、日本統治時代に台湾総督府で民政長官を務めた後藤新平を挙げ、「衛生観念や医療普及に努め、アヘン吸引も根絶させた」と述べた。同協会の河原功参与は、台湾人で初めて医学博士号（京都帝大）を得た杜聡明の功績を紹介。台湾が

コロナ対策で成果を上げた基礎に、日台の歴史的な人と人の結びつきがあったと分析した。

同協会は台湾で戦前に生まれ、終戦で日本に引き揚げた「湾生」と呼ばれた約20万人の親睦を図る狙いで1950年に発足。日台の民間交流を続けている。

（河崎真澄）